

三ノ八、沙門信長笠置寺弥勒殿毎月仏供勸進状

出典 弥勒如来感応抄（東大寺蔵）

解説 毎月仏供とは毎月一回供米一升をもつての寄進者の姓名を永く寺に伝え、弥勒下生の時を期するものである。本文中「一上人」とあるは笠置寺入山前の貞慶のことであろう。貞慶は建久四年秋（一一九三年）に笠置寺に移るが、既にこの頃から笠置寺との交流があったものと思われる。

原文

勸進

笠置寺弥勒殿毎日仏供事*

日とあるが内容から月が正しい

夫笠置寺者本朝第一之名区慈尊無双之靈地也皇帝発願企
起立於万年之塵天人降斧終刻彫於一夜之風既而留金容於
洞裏焉拜之如臨俱婆龍王之仏影窟挿石像於雲表矣礼之似
詣末田羅漢之多麗山沢之奇異跡絶常篇仏子忝烈积尊四部
之衆聊仰弥勒三会之化每見此像莫不感腸仍與一上人竊有
相議自去寿永二年始齋会於当山遂捨田畝而宛資供勸道俗
而請結縁歳々卜三日之佳期念々唱八名之法音我願既滿衆
望亦足重発毎月一度供米一升之願則破銅器以鑄仏鉢爰思
惟云念仏者一年一季之勤也供養者一月一度之功也猶所恨
非長日矣不如唱知識成弁此大事遂露中瞻不憚外門人有所
聽我願紀熟也但度数任力之堪年限在人之志縱雖暫時須臾
敢非可嫌若夫誠家孫門弟亦復所欣也具録姓名永伝寺家自
記日月宜送道場若有其闕更加他人盡未來際永不失隧功少
益多詞短志遠勸誘之趣亦不可乎嗚呼彼彌候之供蜜也感妙
果於上天之月童兒之施沙也飛鉄輪於南浮之風賤禽幼嫁猶
有帰仏界之誠況於善男善女之淨信哉龜供微善猶有招勝報
之力況於無二無三之願念哉是以少因大果既知尼拘陁之五
百乘見仏聞法盍期龍華会之九十億然則同心之人一縁之輩
同仕大慈尊共発菩提心天上人間増道損生三有四恩濟度利
生仍勸進如件

元暦二年

沙門信長

読み下し文

笠置寺弥勒殿毎月仏供事

夫れ笠置寺は本朝第一の名区にして慈尊無双の靈地也。皇帝（笠置寺の草創は天武天皇の勸願による。笠置寺縁起）発願し、起立（建物を建てること）を万年（よろずよ）の塵（世代）に企て、天人斧を降し刻彫を一夜の風に終る。既に金容（金色の仏像）を洞裏（深い谷の中）に留め、之を拝するは俱婆龍王の仏影に臨むが如し。窟は石像を雲表に挿す。之を礼するは末田羅漢の多麗山（多麗羅川中の大伽藍の側に木に刻める金色の弥勒像あり、末田底迦の造る所なり、大唐西域記烏杖那国の条）に詣でるに似たり。沢の奇異の跡、常篇（教典）を絶ゆ。

仏子（仏弟子）忝なくも釈尊四部の衆（比丘、比丘尼、在俗信者の男女）に烈り、聊か弥勒三会の化を仰いて此の像を見る毎に感腸せざる莫し。

仍つて一上人と窃かに相い議すること有り。去る寿永二年（一一八三年）より齋会（僧を集めて食を供養する法会）を当山に於いて始む。遂に田畝を捨（寄付する）て、資供に宛て、道俗に勧めて結縁を請い、歳々三日の佳期を卜（占う）し、念々八名の法音（説経の声）を唱う。我が願い既に満ち、衆望（多くの人々の望み）亦足る。

重ねて毎月一度、供米一升の願いを発す。則ち銅器を破し以て仏鉢を鑄す。爰に思惟して云わく、念仏は一年一季の勤なり。供養は一月一度の功なり。猶恨む所、長日（一日一日を継続して長い日数を経過すること）に非ず。知識（名僧）成弁（願を成就すること）唱うるに如かず。此の大事、露中に遂げ、瞻（まごころ）憚らず。外門の人、我が願い聴く所あり。紀、熟する也。但し度数（物事の回数）力の堪えるに任し、年限人の志に在り。縦へ暫時と雖ども、須臾（しばらく）敢えて嫌うべきに非ず。すなわち夫れ誠に家孫、門弟またまた欣ぶ所也。

具に姓名を録し永く寺家に伝え、自ら日月を記し、宜しく道場に送る。若し其の闕（欠ける）有らば更に他人を加え、盡末来際（未来永劫）永く失墜せず。功少なくも益多く、詞短くも志遠し。勧誘の趣亦た可とせずや。

嗚呼、彼の彌候（おおさる）の蜜を供するや、妙果（善根功德により得られる果報）を上天の月に感ず。童児の沙（うすもの）を施すや、鉄輪を南浮（南閩浮州、人間世界の意）の風に飛ばす。賤禽幼嫁も猶仏界に帰る（おもむく）誠有り。況や善男善女の淨信（きよらかな信心）に於いておや。

鹿供（粗雑な供え物）微善（わずかな善根）も猶勝報（優れた報い）を招く力あり。況や無二無三（一筋に物事を成すこと）の願念に於いておや。是に少因を以て大果を既に知る。尼拘陁（インドのイチジクの木。この樹木は非常に大きくなるが、その種は小さいので、どんな微少な布施であつても仏への供養は大きな果報をもたらすことの例えに使われる）の五百乗は見仏聞法（仏にまみえて教えを聞くこと）なり。蓋し龍華会の九十億を期す（弥勒が五十六億七千万年後この世に下生して龍華樹のもとで説法、初会で九十六億人、二会で九十四億人、三会で九十二億人が悟りを得るとする）。

然れば則ち同心の人、一縁の輩、同じく大慈尊（弥勒如来）に仕え共に菩提心（仏道を求めること）を發し、天上人間に増道損生（道を盛んならしめて生死を超越すること）し、三有（衆生が往来、止住する三つの世界。我々が生死流転する欲界、色界、無色界）四恩（父母、衆生、国王、三宝

より受ける四種の恩)、濟度(仏の道によって衆生を救い、極楽の彼岸に渡すこと) 利生(仏が衆生に利益を授けること) されん。仍って勸進件の如し。

元暦二年(一一八五年)

沙門信長